日本のソフトボールの普及・発展に関する一考察

Consideration about spread and development of softball in Japan

1K10C392-4 町田 ひかる

主査 友添秀則 先生 副査 吉村正 先生

【序章】

本研究は、日本における「ソフトボール=マイナー競技」の印象があるのはなぜなのだろうかという、私自身が競技者としての生活を通して感じた問いを動機としている。2008年北京五輪では日本女子ソフトボールチームが優勝し、2011年にはソフトボール界からプロ野球選手が誕生するなど、近年は以前に比べるとソフトボールが世間から注目を浴びる機会が増えている。しかしながら、未だ周囲の認知度や競技人口の点でも他競技に比べ発展途上の段階にあり、マイナースポーツという印象を払拭できていない。そこで、今後の日本ソフトボール界の普及と発展のための方策を、2010年度日本ソフトボール協会のデータ、および関連文献の購読により、究明したいと考えた。

【第1章】

本章では、ソフトボールの誕生から現在に至るまでの世界中でのソフトボールの歴史を明らかにした。ソフトボールは12、13世紀にイギリスで行われ始めたクリケットを起源とし、その後ラウンダース、ストボールとへとルールが簡素化された。そして、18、19世紀にはイギリス移民によってアメリカに移入された。その後、1926年にYMCA主事のウォルター・ホカンソンによってソフトボールという名称が改められた。1929年には様々な規則の下で行われていたソフトボールの原型となる球技を統一し、プレイグランド大会がシカゴで開催された。その後、1933年に米国ソフトボール協会が設立され、1936年には競技人口が1000万人を越え、1992年にはアメリカにおいて1億2千5百万人の競技人口とファンを持つスポーツへと成長した。日本への伝播・普及に関しては、大谷武一が伝えたと言われているが、それ以前にもソフトボールに近い球技が行われていた。それ以降、国体の種目に採用されたり、オリンピックで日本チームが活躍することで、ソフトボールの知名度は、高まっていった。

【第2章】

本章では、日本ソフトボールの現状と問題点を究明するために、2010年度日本ソフトボール協会から提供して頂いたデータを参照し、競技人口を分析した。本データから、都道府県別、男女別、競技レベル（高校、大学、実業団、クラブチーム）別に競技人口を分析し、その傾

向を明らかにした。2010年度登録者数は138,615人であり、都道府県別には埼玉県が9,478人となり最も多く、次いで山梨県7,202人、静岡県6,789人となった。男女別には男子91,678人、女子46,928人となり、女子の競技人口は男子の約半数であることが明らかになった。各競技レベルにおける傾向として、高校における競技人口が最も多く男子6,677人、女子27,201人となった。しかしながら、大学、実業団、クラブチームにおける競技人口の特徴として、男子の方が女子に比べ競技人口が多くなっており、実施地域も広範囲であることが明らかになった。これらのデータから、各競技レベルにおいて競技人口が0人の地域が多く存在していること、また女子の競技人口が少ないことがソフトボールの普及・発展に関する問題点と考えられた。

【第3章】

本章では、他種競技、特に日本サッカー協会の普及活動と比較し、今後のソフトボールの普及、発展に向けた方策を検討した。日本サッカー協会では、普及、発展を目的とした11項目の『プレジデント・ミッション (PRESIDENT'S MISSION)』を掲げ、エリート選手の養成や子供の年代への競技浸透および人材育成、女子サッカーの推進やフットサルの普及などの活動を行っている。さらに、校庭や公共グラウンドを芝生化するなどの社会貢献活動も数多く行っている。一方でソフトボールにおける普及活動、および選手の育成方法を、日本ソフトボール協会のホームページから調査し、検討してみると、その活動は殆ど明記されていない。サッカー界における普及活動から「ジュニア期の選手の育成」、「類似スポーツの普及による競技人口の底辺拡大」、「社会貢献活動」、「広報システムの整備・充実」の点において、今後のソフトボールの普及と発展のために見直しが必要であると考えた。

【結章】

本研究は、日本における更なるソフトボールの普及・発展へ導くための方策を明らかにすることを目的とした。五輪種目への復帰のためにも、まず日本国内におけるソフトボールの普及を考えていくべきである。その際、本研究で明らかにした方策を具体化していくことが、一つの手がかりとなるであろう。